HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国語学習環境における日本語学習者の動機づけ : メキシコの学習者を対象とした分析から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐藤, 梓
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13629号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74404
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Azusa_Sato_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：佐藤　梓

審査委員	主査　教授	小林　由子
	副査　教授	河合　靖
	副査　准教授	平田　未季

学位論文題名
外国語学習環境における日本語学習者の動機づけ
―メキシコの学習者を対象とした分析から―

本研究は、「外国語環境」で選択科目として大学で日本語を学ぶ学習者の学習動機づけについてメキシコでの調査に基づき明らかにしたものである。「外国語環境」とは教室外では目標言語が使われていない環境を意味し、日本語教育においては海外での日本語教育を指す。

海外での日本語学習者の動機づけに関しては、特定の国の日本語を主専攻とする大学生などの日本語学習者に対して行った質問紙調査の結果を因子分析し「なぜ日本語を学ぶのか」を示した研究が多い。

本研究の意義の第一は、従来はあまり研究対象となってこなかった「特に必要ではないが興味をもって外国語を学ぶ学習者」の学習動機を、内発的動機づけの観点から明らかにしたことである。従来の研究では、「どのような動機づけを持っているか」という要因の抽出の他には、日本語以外の外国語学習者研究も含め「動機づけをいかに高めるか」という研究が主であった。そのため、動機がない、あるいは報酬のために学ぶ外発的動機づけをもつ学習者が、学習内容に興味をもって自ら学ぶ内発的動機づけを高めていくという「自己決定理論」による分析が多かった。自己決定理論において外発的動機づけは複数の段階に分けられ検討されているが、内発的動機づけについては、「目標状態」とされていることもあり、それほど詳細な分析はなされていない。

しかし、近年、この内発的動機づけを分析する研究が教育心理学の分野で行われるようになってきた。本研究では、そのひとつである「興味」の研究成果を援用し、学習を継続している者について、知識量が増えるにしたがって興味の質が変化するという先行研究での知見を裏付けた。さらに、従来の日本語教育では学習を阻害すると考えられがちであった「複雑さ」「難しさ」がむしろ学習者の知

的好奇心や挑戦志向を促進することが示された。これは本研究の第二の意義である。

本研究の第三の意義は、国際交流基金の調査などで日本語学習の促進要因とされてきた日系企業の進出が、少なくともメキシコにおいては日本語学習の動機づけとなっていないことを、日系企業進出の度合いが異なる地域の比較によって明らかにしたことである。上述のように、日本語教育研究における動機づけ研究は「なぜ日本語を学ぶのか」が主に検討されてきたが、日系企業進出は海外での日本語学習促進要因として挙げられることが多かった。メキシコにおいては、英語が第二言語として用いられることが多く外国企業では業務のための言語として英語が用いられることも日系企業進出が日本語学習に直結しない理由の一つと考えられる。

本研究の第四かつ最大の意義は、今回対象となったメキシコの大学で選択科目として日本語を学ぶ学習者の学習動機が、日本語教師の予測を裏切るものであったことである。対象者の内発的動機づけは高いが、外発的動機づけ・内発的動機づけのより詳細な枠組みである「二要因モデル」により因子分析を行ったところ、「日本語の新しい知識を得る」「日本語が使えるようになる」という項目は「知的技能の獲得」として独立した因子を構成したものの平均値が低く、「知的訓練」「学習の有用性」の平均値が高かった。すなわち、対象者は、日本語学習そのものに興味を持ち学習の価値を見出しているが、日本語について新しい事柄を学び使えるようになることをそれほど志向していない。むしろ、母語と異なる複雑な言語を学ぶことによる知的訓練に学習の意義を見出している。日本語教育では様々な文脈で日本語が実際に使えるようになることを志向することが多く、教師は学習者が日本語の知識を高め使えるようになることを期待する。学習者がそのような志向を持っていない場合、動機づけが高いにもかかわらず教師からは「やる気がない」と評価される危険性がある。このような環境での日本語学習設計や評価の枠組みについては検討の余地があろう。

「上達を志向しない学習者」の存在は既に先行研究で指摘されているが、本研究はそれを初めて実証的に示した。同様の現象は、日本の大学での初習外国語においても存在すると予想される。そのため、本研究は、まだそれほど先行研究がない日本の第二・第三外国語など初習外国語教育における学習者研究にも寄与すると考えられる。

質疑応答では、メキシコにおける日本語学習の状況についての確認、分析の枠組みに元来は日本での英語学習を分析するために開発された二要因モデルを使用した理由などについて質問があったが、応答は明確であった。大学生以外の対象者についてはどうか、日本語に収束しない興味もあるのではないかという指摘もあったが、それは今後の研究課題であろう。

以上の点から、本審査委員会は、佐藤梓氏が、北海道大学博士（学術）を授与される資格を有すると結論するものである。

（以上）